副田先生の思い出

土　井　隆　義

副田義也担当「現代社会学の系譜」。筑波大学第一学群社会学類に入学後、はじめて受講した社会学の専門授業だった。マルクス、フロイト、ウェーバー…。名だたる知的巨人たちの研究業績を整理概説しつつ、社会学の源流を説き起こしていくスリリングな講義だった。

先生のお名前は、筑波大学へ入学する以前から知っていた。マンガ研究で有名な社会学者がいると受験雑誌などで読んでいた。そんな先入観があったので、社会学者から眺めたマンガの話でも聴けるのかと思い込んでいた。そこへいきなりマルクスの話である。ガツンとやられた。

ウェーバーが社会学者であることはもちろん知っていたが、いわゆる社会学の入門書しか読んでいなかった私にとって、社会学の源流に位置づけられるのはコントやデュルケム辺りなのだろうと思っていた。ところが副田先生の授業は違った。学問領域を越えて知はつながっている。またそれは現代のサブカルチャーを解き明かすための武器にもなる。まさに目から鱗だった。

副田先生は、大学院の学生たちと一緒に私的な読書研究会も開催されていた。大学３年になった夏休み、「研究会の夏期合宿があるんだけど、君も参加してみたらどうだい？」と、ある院生から声をかけられた。三鷹にあったある研修施設に泊まり込み、３日間の議論に加えてもらった。

そのとき輪読したのは、忘れもしないマルクスの『資本論』である。あらかじめ読んでみたものの、まるでちんぷんかんぷんだった。私の読み方が悪かった。合宿では、一字一句をなめるように読み進めながら、座礁地点で文章の意味を議論するという繰り返しが朝から晩まで続いた。無味乾燥な文字の固まりがやがて氷解し、自然と踊り出していった。

副田先生が解説を加えることはなかった。しかし、学生たちと何度も議論を戦わせた。３日目、読書会の雰囲気にも慣れてきた私は、ある箇所での先生の読解に対して、その解釈では別の箇所に書かれて内容と矛盾するのではないかと疑問をぶつけてみた。先生は、「う～ん」と唸ってしばらく考え込んでくれた。その様子を眺めながら、なるほど古典とはこのように読んでいくものなのかと深く感じ入ったのを覚えている。読み方に正解などない。これも目から鱗の経験だった。

筑波大学を卒業後、私はいったん就職したが、やはり研究の道を歩んでみたい

との思いを断ちがたく、思いきって大学院へ進学した。しかし進学先は、卒業論文の執筆時に大きな影響を受けた研究者が多くいた関西方面の大学を選んだ。ご縁をいただき、専任講師として再び筑波の地を踏んだのは、それから5年後のことである。

筑波大学社会学研究室のスタッフに加えていただき、副田先生と奇しくもまたご一緒できるようになったが、研究者として駆け出しの頃の私は、研究対象も研究方法も大きく異なっていると考え、先生が主催される研究会に再び参加することはなかった。しかし、いまになって思う。現在の私の研究を根底で支えているのは、あのときに衝撃を受けた先生の講義であり、あのときに感じ入った先生の議論なのだと。